

デューイ教育思想の形成と原理 (6)

—— 行為の倫理学の構想 ——

小 柳 正 司

(1992年10月15日 受理)

The Early Developments of John Dewey's Philosophy of Education and
Its Underlying Principles (6)

—— From Teleological Ethics to The Ethics as a Science of "Conduct" ——

Masashi KOYANAGI

1. 目的論的倫理学から行為の倫理学へ

デューイは、ミシガン前期の1887年に、倫理学に関する彼の最初の論文として「倫理学と自然科学」と題する論文を書いている。¹⁾ この論文で彼は、人間の倫理的当為をもっぱら生物進化の「法則」から演繹するスペンサー流の進化論的倫理学を、科学的決定論の典型として批判の俎上にのせた。すなわち、進化論的倫理学によれば、進化の「法則」は科学的に実証された事実であり、それは自然がある特定の「目的」に向かって進む自然史の過程であることを示している。そして、人間もまたこの自然史の過程の一部に属しているのであるから、人間は自然の「目的」を自らの目的とし、自然の「法則」に自らの行動を従わせなければならないというのであった。こうして、進化論的倫理学は、人間の倫理的な世界も自然科学の方法と概念によって説明することが可能であり、そうすることによって倫理学を旧来の神学的形而上学の独断から解放することが可能になると主張した。

これに対して、デューイは、人間の道徳的行為をそのような純然たる自然史の過程から説明することはできないし、従って倫理学を自然科学のカテゴリーによって基礎づけることはできないと主張する。なぜなら、道徳的行為は、人間の主体的な意志作用に発する目的実現の過程であって、それはある観念(理想)を行動を通して現実化しようとする人間自身の目的意識的な活動だからである。自然科学が明らかにする自然史の過程は、人間の意志作用とは関わりなく進行する物質現象の機械的な系列であって、そのような自然史の事象系列にはただ「不断の変化」「運動の変態」があるのみで、自然としての自然の中にはいかなる意味においても「目的」「意図」は存在しない。それゆえ、人間の道徳的行為を単なる事象系列の因果連関に解消することはできない。このように

してデューイは、人間の倫理的世界を自然的世界から区別し、自然科学は人間の倫理的世界を説明できないと主張するのである。

では、倫理学を基礎づけるものは何だとデューイは言うのであろうか。この点について、彼は次のように述べている。

「われわれは、正しい行為の説明としての倫理学、および行為を実際に正しく遂行することとしての道德生活は、実在の物理的解釈と一致しないことを示さなければならない。それは、実在の精神的解釈とのみ一致するのであって、その精神的解釈は、広く本質的な特徴においては、キリスト教神学の教えと同一であることを、われわれは示さなければならない。」²⁾

ここでデューイが「実在の精神的解釈」と言っているのは、「世界の目的論的解釈」すなわち「世界を理性の具現および知的意図の顕現と見なす解釈」³⁾とも言われているものである。それは、自然史の過程を純粹に物資主義的な事象の継起へと解体してしまわないで、それらの事象の背後にあって、それらを全体として包括的に統一している「最終原因」とか「意図」とかいった精神的存在を、自然史の過程そのものの中に読み取ることである。すなわち、科学的に実証された事実として、ある特定の目的に向けて進化する自然史の過程というものが認められるとすれば、それこそまさに、自然はその核心において精神的存在であることを示しており、全ての自然現象の背後にははじめから何か精神的なものが作用していて、それが物質的諸事象の時間的継起を通じて次第に姿を現してくると考える以外、宇宙進化の科学的事実を合理的に説明する方法は他にないではないかということである。そして、このような「実在の精神的解釈」は、神は真理として世界に内在し、自からをあますところなく人間に示すという「キリスト教神学の教えと同一」であるとデューイは言うのである。

もともとデューイには、宇宙を一個の有機的な統一体として捉え、宇宙が一個の有機体であるならば、そこには何か根源的な生命作用というものがあって、それが諸部分を一つの目的（つまり生命の自己完成）に向けて相互内在的に結び合わせているとする有機的・目的論的な世界観があった。そして、それが彼の有神論的観念論を支えていた。だから、彼が人間の倫理的理想は「世界の目的論的解釈」すなわち「世界を理性の具現および知的意図の顕現と見なす解釈」とのみ一致するものだというとき、それは人間が自己を含む世界全体を一つの理念（目的）のもとに統一する「理性」「知的意図」を認識し、その実現に向けて自己の行動を主体的に律していくところに、人間の倫理的世界の成立を求めたものであった。こうして、デューイの倫理学は、「実在の精神的解釈」に基づいて、世界を理念の目的論的な実現過程と見なし、しかもこの過程は自然としての自然による過程ではなくて、まさに人間自身が自らの「意志的選択」に基づいてこの世界理性の知的意図を実現していくことによって達成されるとする目的論的倫理学として提示されたのである。

「倫理学と自然科学」に続いて、翌年（1888年）にデューイは『民主主義の倫理学』と題する小冊子を出している。ここでのデューイの課題は、市民社会を諸個人の算術的な集合体と見なす原子論的個人主義の民主主義観を批判して、それに代わる民主主義観を、「共通意志」のもとに組織さ

れた「道徳的精神的結合体」として提示することであった。そのために、彼は個人を「集中化された社会」(society concentrated)として、すなわち「自己自身の内部に全有機体〔社会全体〕の精神と意志を具現し現実化する存在」として捉えなおす。⁴⁾ 言い換えれば、社会の「共通意志」は、個々人を通して、個々人の内面に現実化されるのであり、個人はいわば社会的共通精神の器官と見なされる。ここでもデューイは、原子論的個人主義を自然科学の抽象的な機械論に基づくものとして批判し、それとの対比で、自らの立論を一種の有機体説に基づいて展開している。だが、社会の「共通意志」とは一体いかなるものであるのか、デューイはそれを説明していない。彼はただ、一定数の人々が集まって社会を構成しているかぎり、そこには個々人の単なる算術的総和には還元されない普遍的な精神、統一された意志というものがあるはずだし、なければならぬと言うのみである。あるいは、それは社会を社会たらしめる生命のようなものだとも言う。いずれにせよ、それは彼にとって一個の理念的所与として措定されるものにすぎない。

このように、ミシガン前期のデューイは、自然としての自然には人間の行為を動機づけるいかなる理念・目的も存在しないとすることで、人間の倫理的世界を純然たる自然的世界から区別する。デューイにとって、世界は単なる諸部分の集合ではなく、内在的な精神がその隠れた根源から徐々に自己を完成させていく生命の過程であり、そうした生命過程として世界は諸部分の有機的関係のうち一個の統合体として現れるものである。そして、人間の倫理的世界はこのような「世界の目的論的解釈」すなわち「世界を理性の具現および知的意図の顕現と見なす解釈」とのみ一致するとデューイが言うとき、彼は社会の「共通意志」が個々人を有機的に統合し、個々人を通して実現されていく、そのような倫理的共同体を倫理的世界の規範秩序として想定しているのである。これは、個人と社会の統一めざすきわめて理想主義的な主張である。

だが、デューイは、社会の「共通意志」の存在を前提し、その個々人を通しての顕現という一種の予定調和的な図式を描きながらも、彼はこのように前提された普遍的なるものがいかにして個人のうちに実現されるのか、言い換えれば、個人はいかにして普遍的なるものを自らのものとすることができるのかという、すぐれて心理学的な問題把握を中心にして倫理学を展開していく。このことは、彼が社会的な「共通意志」の個々人を通しての顕現は「共通意志」への参加を媒介とする個人の自己選択的な発達として生じなければならないとしている点に現れている。すなわち、彼は個人の内発的契機（「人格的責任」「個人的自発性」）の第一犠牲を強調し、社会の「共通意志」が個人に対して外在的に課せられることに反対している。

「民主主義は、人格の完全な意義が既に社会において客観的な形で個人に示されているときのみ、個人はその意義を知ることができるということを認める。民主主義は、人格の実現に対する主要な刺激と激励が社会からくるということを認める。しかし、それにもかかわらず、人格は、墮落した弱いだれかのために、賢明で力強いだれか他の人が調達してやるようなものではない。民主主義は、人格の本質があらゆる個人の中に内在しているということ、そしてそれを発達させようとする選択は、当の個人から発するものでなければならないということを主張

する。]⁵⁾

社会的「共通意志」は、確かに個人を越えた存在ではある。そして、個人は「共通意志」のもとに統合された社会の有機的な一員としてのみ、自己の人格を獲得しうる。だが、このことは個人の内発的な契機を媒介として達成されなければならないのである。デューイは、自らのこのような立場を「倫理的個人主義」と呼んでいる。こうして彼は、倫理的規範秩序の統合原理である「共通意志」の存在を、個人の人格発達の過程、すなわち個人による「共通意志」の自己選択的な実現の過程のうちに求めていくことになる。

「個人が国家におけるすべての人々と調和するような、すなわち彼が共同体の統一された意志を彼自身のものとして所有するような、そのような個人の発達が、すなわち政治学と倫理学の目的である。]⁷⁾

こうしたデューイの立場は、個と普遍についての独特の関係把握を必要とした。この課題を彼は、ヘーゲル主義時代の彼の思想的偶像であったトマス・ヒル・グリーンに対する批判という形で成し遂げる。⁸⁾ デューイのグリーン批判は、次の一点に集約されている。すなわち、グリーンは「普遍的意識」が、人間のあらゆる個別的意識のうちに、既に事実として実現されていることを認めることができなかつたということである。その結果、グリーンにおいては、普遍的なものは個別的なものとの彼岸にたつ先験的な抽象的統一にとどまり、人間の道徳的行為は、一つ一つの具体的な行為に先立って彼岸に置かれた外在的な理念に照らして、その達成に努力する他律的行為となる。これに対して、デューイは、普遍的なものははじめから個別的なものの多様な展開のうちに内在していて、それらを目的論的に方向づけ、それらの目的論的な展開過程を通して自らを実現していく具体的統一であると主張する。言い換えれば、普遍的なものは、人々の個別的な行為に先立ってある理念（目的）ではなく、個別具体的な行為の発現とともに、そのつど行為の発現を方向づけ、それら一つ一つの行為の発現を貫いて持続していく普遍的な意志の作用なのである。かくして、デューイは、彼岸にたつ普遍者の概念がもっていた理念的契機を人々の具体的な行為の生成過程のうちに引き降ろし、普遍的なものを個別的な行為の展開過程に即して捉える「行為の倫理学」の構築に向かうのである。

普遍的なもの（理念的なもの）は、個別的なもの（現実的なもの）を通して自らを実現していく。普遍と個、理念と現実の関係をこのようなヘーゲル流の論理図式で考える点では、グリーンとデューイは共通である。しかし、グリーンは普遍的なものを一個の理念的所与として個別的なものとの彼岸に置き、個別的なものは外部に設置された理念（目的）の実現をめざして努力するものとした。これに対して、デューイは、普遍的なものは個別的なものの目的論的展開を通じてのみ存在するとして、人々の具体的な経験に先立って、それらの彼岸に理念（目的）を置くことを拒否する。そして、経験を導く理念（目的）は、まさに経験自体の具体的な展開の中から生ずるものとする。

2. 「行為」の概念

こうして、デューイは、個々の具体的な行為を分析対象とする「行為の倫理学」を構想し、この行為の中で、理念的なものと現実的なものとの統一を図ろうとする。そこでまず、デューイの言う「行為」(conduct)の概念を見ておくことにしよう。1891年の論文「道徳の理論と実践」の中で、彼は「行為」を「諸観念に基づいた、諸観念を実現しようとするすぐれて人間的な活動」⁹⁾と定義している。同様に、「行為は理論の表現」であり「行為の名に値するものがあるならば、少なくともその行為に見合うだけの観念、理論がある」¹⁰⁾とか「行為が単なる衝動によるものではないとすれば、行為する以前に常に理論をもっている」¹¹⁾というふうにも論じている。つまり、デューイの言う「行為」とは、単なる衝動に発する活動や型にはまった機械的な行動、あるいは他人の指示や命令によって動かされる行動とは概念的に区別されて、為されるべき事柄について、行為者自身が行為に先立ってあらかじめ彼の頭の中に観念(目的)をもっていて、そうした観念(目的)を行動を通して実現していくことを言うのである。すなわち、「行為」は人間の目的意識的な活動である。こうした「行為」の概念はヘーゲルの言う「労働」の概念にほぼ相当するものと見てよいであろう。そして、デューイは、人間がこの観念(目的)の実現をめざして自らの衝動や欲求を規制し、行動を目的意識的に統制するところに「行為」のもつ道徳的性格を見るのである。かくしてデューイの倫理学は「行為の理論」として提示されることになる。

こうした「行為」の概念は、彼の倫理学の第一論文「倫理学と自然科学」(1887年)においても既に示されていた。ということは、この「行為」の概念は、デューイの倫理学のいわば出発点からの鍵概念だったということである。この論文で、デューイは道徳的行動には三つの特徴が見出されるとして、①ある目的に向かっての活動、すなわち目的をもった活動であること、②人間の意志的選択から発する活動であること、③今は存在しないが存在すべき理想に向かっての活動であること、の三点をあげている。¹²⁾これらのうち①と③は同一の事柄の二側面だと彼は述べているので、結局、彼の言う道徳的行動は、人間の主体的な意志作用に発する目的実現の活動であるということになる。ここでデューイが「行為」を行為者自身の「意志的選択」に発するものとしている点は、彼の「行為」の概念を理解するうえで重要である。つまり、「行為」は目的実現の活動ではあるが、目的は行為者の外側からやってきて行為者にその実現を課するものではなくて、行為の目的は行為者自身が自らの意志に基づいて選択し、それゆえに自らその実現に努めるものでなければならないということである。この点について、デューイは次のように述べている。

「人間の目的である目的は、倫理的であろうとなかろうと、人間自身が実現の力をもっている目的でなければならない。それは、彼に対して直接的でパーソナルな関係にたっていないなければならない。倫理的理想について語ることは、もし人間が彼自身のうちに目的をもつか、あるいは彼自身が目的であるのでなければ、全くナンセンスである。」¹³⁾

このように、デューイは、行為主体の自律的な目的実現の活動を、他の活動一般から区別して「行

為」と概念規定し、自然現象の物理的世界とは質的に異なる倫理的世界の成立基盤を、この人間の「行為」の世界に求めるのである。

以上のような「行為」の概念は、「行為の倫理学」の体系的な展開を試みた1891年の『批判的倫理学理論概要』の「序論」において、いっそう明確に整理されている。まず第1に「倫理学の定義」と題して、倫理学は、人類学、民族学、心理学と同様に人間の行動を説明する科学であるが、人類学等々が行動の記述 (describe) に専念するのに対して、倫理学は行動の判断 (judge) を任務とすると述べている。¹⁴⁾ このように、倫理学は行動の記述ではなく判断に関わる科学だとして、倫理学を他の人間諸科学から区別している点は、1887年の論文「倫理学と自然科学」で倫理学を事象の自然科学的説明から区別し、「倫理学は“is”に関わらないで、“ought”を語る理想を要求する」¹⁵⁾と述べていた点に通じている。つまり、デューイにとって人間の倫理的世界は、事象の機械的な因果連関の世界にとどまらないで、事象の目的論的展開を通じて達成される理念に関わる世界なのである。

だが、第2にデューイは、倫理学の任務は、“ought”つまり「何を為すべきか」を行動に先立ってあらかじめ決定することではなくて、そうした“ought”の要素を現実の行動の中から析出することであると述べている。¹⁶⁾ これは、理念的なものを現実的なものに先立つ実体としないで、それを現実的なものに内在する理念的契機として捉えるデューイの基本的な立場を表している。

それゆえに、第3にデューイは、倫理学が対象とする行動は、単なる活動 (action) や運動 (movement) 一般ではなく、その中に理念的契機を含む人間の意志的行動、つまり「行為」 (conduct) であると規定する。すなわち、デューイは、活動一般から「行為」 (conduct) を概念的に区別して、「行為」は「それが実現する目的との関連において見られた実践、行動」であると定義する。¹⁷⁾

「行為とは何か。それは活動一般とは区別されなければならない。というのは、いかなる変化の過程、例えばポンプの動き、植物の成長、犬の吠声も活動と呼ぶことができるからである。行為は、単に何かが生ずるといふこと以上のものを含んでいる。行為は、目的、動機、意図というものがそこに含まれていることを意味している。」¹⁸⁾

「行為」を「行為」たらしめるもの、それは行為の「目的」である。「行為」はその中に理念的契機を含む人間の意志的活動である。

「行為は、活動一般のように単に原因 (cause) をもつというだけではなくて、理由 (reason) をもつのであり、理由は行為者の精神に現前するのである。自分が行う価値があると見なすものを、自分自身によって達成されるべき目的として自分自身に提示することができる存在 (being) があってはじめて、行為は存在するのである。そのような存在 (being) が道徳的行為者であり、彼の活動が意識的なものであるとき、それは行為である。」¹⁹⁾

人間の活動が単に「原因」をもつだけで「理由」をもたないものであれば、それは機械的な因果連関に還元可能な単なる活動であって、「行為」とは呼ばれない。「行為」は、その中に活動する本人

の目的、動機、意図が含まれているからこそ「行為」なのであり、いわばそれ自体のうちに活動の原因をもつものである。つまり、「行為」は外的動因の結果として生じるものではなくて、行為主体の内発的な意志作用の結果として生じるものである。それゆえに、活動一般からは区別される「行為」の世界は、精神をもった存在、つまり自らの活動の目的を自ら意識しうる精神的存在があってはじめて成立する世界なのである。

そして、デューイは、このような「行為」によって成立する世界を道徳的世界と呼ぶ。ここで彼が「道徳的」(moral)と言っているのは、「不道徳」(im-moral)に対する「道徳」という意味においてではなく、「非道徳」(non-moral)に対する「道徳」という意味において言っている。つまり、彼の言う「道徳的世界」とは、機械的な因果連関の支配する物理的世界（活動一般はここに属する）に対置された目的論的な理念の世界であり、活動一般と行為との概念的な区別はこれに対応しているのである。

そして第4に、デューイは、行為の目的は「行為の結果の見通し」(the result in view)であると述べている。²⁰⁾すなわち、行為の目的とは、行為者が自らの行為によってもたらそうとするある特定の結果 (consequence) を、あらかじめ自分の頭の中に観念として思い描いているものだけということである。そして、行為はこのような「思い描かれた結果」(conceived results) を現実的な結果へともたらし実現するための実践であるから、この行為者の頭の中に思い描かれる「予見された結果」(foreseen consequences) は、まさに行為の目的、動機、意図であり、それが、遂行されるべき行為の具体的な内容を決定づけるとデューイは言う。

「思い描かれた諸結果は、遂行されるべき行為の内容を構成する。……予見された理念上の諸結果は行為の目的であり、そのようなものとして動機を形成する。」²¹⁾

行為は目的意識的に展開される一連の活動である。だが、行為の目的は、遂行されるべき行為に対して外側から挿入されてくるものではなくて、一連の活動を遂行していくうえでの見通し (end in view) として、あるいは行為の予見された結果として、行為者自身によって構想されるものである。従って、行為の目的は、遂行される行為それ自体の一部であり、目的意識的に展開される一連の行為の過程の構成要素である。なぜなら、行為の予見された結果、つまり行為の目的は、いわば行為者の頭の中に観念として先取りされた行為そのものに他ならないからである。

こうした目的概念は、ミシガン後期にいたってデューイがはじめて展開してみせた彼独自の目的概念であって、それは「行為」の概念と一体となって、彼の「行為の倫理学」を基礎づけているのである。そして、この「行為の倫理学」こそは、理念的なものは現実的なものを離れては存在しえず、それは現実的なものの目的論的な展開過程を通じてのみ存在しうるというデューイの初期からの哲学的立場を、最終的に首尾一貫した理論の形で完成するものであった。その意味でも、新しい「目的」概念に支えられた「行為」の概念は、デューイの初期思想形成上の決定的な着想だったのである。

3. 倫理学の科学化

かくして、デューイの倫理学は、行為をそれ自体のうちに理念的契機を内在させた生きた活動として扱い、それを理念が現実へともたらされるダイナミズムの過程として分析する「行為の科学」となる。そして、デューイは、いわゆる道德の理論に関して、抽象的な理念や規範、義務などを具体的な行為に先立ってそれら自体として提示しようとするいっさいの試みを拒否して、道德の理論は具体的な行為を分析するための「道具」(tool) に他ならないと主張する。

こうしたデューイの主張は、倫理学を神学的形而上学の軛から解放して、それを一個の「科学」として確立しようとする彼の努力を反映するものであった。だが、この倫理学の科学化は、既に1887年の論文「倫理学と自然科学」で示されていたように、倫理学を自然科学、つまり「实在の物理的解釈」一般に還元してしまうことではないとデューイは論じていた。なぜなら、「实在の物理的解釈」は事象間の機械的な因果連関によって世界を説明するものであるのに対して、人間の道德的世界は、理念(目的)の実現をめざして自発的に行動を起こす人間の意志的行為の世界だからであり、それは「实在の物理的解釈」によっては説明できない世界だからである。

それでは、倫理学の科学化はどのようにして可能だとデューイは考えるのであろうか。倫理学は「行為の科学」であり、「行為」はそれ自体のうちに理念的契機を含む人間の意志的活動である。その点で、倫理学が対象とする「行為」の世界は、自然科学が対象とする物理的世界とは異なる。後者は、一連の運動や活動が機械的な原因-結果の関係で生じる世界であり、もし人間の活動がそうした世界に属するものだとすれば、それは「行為」つまり道德的な意味をもった活動ではなくなる。人間の「行為」の世界(道德的世界)は、一連の活動が目的論的な関係において生じる世界であり、それは「行為」を「行為」たらしめる目的(理念)とそれを実現しようとする意志作用とが存在することではじめて成立する世界である。そして、デューイがめざす倫理学の科学化とは、このような理念的契機を内在させた行為の世界を、徹底的に経験的な事実として説明することに他ならないのである。それは、倫理学を「行為」の科学とすることによって、一方で、倫理学の脱形而上学化を図り、道德一般についての抽象的な観念や道德的価値といったものを現実の生きた具体的活動とは無関係にそれ自体として設定する形而上学的試みを倫理学からいっさい排除して、倫理学を経験的に確認できる「行為」の世界に引き降ろすことを意味するとともに、他方で、人間の日常的な活動を、単なる運動や活動一般から区別して、それをまさに道德的な「行為」たらしめる条件を明らかにし、そのことによって道德を経験的な事実として説明することを意味しているのである。

要するに、デューイの構想する倫理学の科学化とは、「行為」というそれ自体のうちに理念的契機を内包させた経験的な事実を倫理学の研究対象に据えることによって、倫理学を形而上学の思弁から解放し、それを「行為」という事実を分析する科学としつつ、さりとて倫理学を自然科学には解消せず、物質現象の世界とは異なる固有の道德的世界の存在を、この「行為」の分析を通じて明ら

かにする試みであったと言えよう。

では、倫理学はどのような意味で「科学」でありうるのか、この点について1891年の論文「道徳の理論と実践」を手掛かりに、デューイの所論を見てみることにする。

この論文で、デューイは、旧来の倫理学は道徳を人間の日常的な行為の世界とは異なった何か特別な領域に属するものとして扱ってきたと述べ、そのために、道徳理論は非日常的な何か特別に道徳的とされる行為のための哲学的「基礎」を提供するものだと考えられてきたと述べている。これに対して、デューイは、倫理学は人間の日常的な行為の世界を対象とし、それ以外のいかなる先験的な概念にも基づかない「行為」についての科学であると規定する。これは、前節で見た倫理学の科学化の見地に立った主張である。そして、道徳理論の性格について、次のように説明している。

「道徳理論とは何か。それは、道徳的洞察と全く一体のものであり、道徳的洞察は手元の諸関係の認識である。これはきわめて平凡で退屈な概念である。それは道徳的洞察すなわち道徳理論を、単に干物を測ったり、釘を打ったり、小麦を売ったり、電話を発明したりするのと同じ日常的知性の働きに存するものとする。……幾何の問題を解いたり、ミルの帰納法理論を学んだりすることと同様に、墮落した隣人を救うことにも、神聖なものや超越的なものは何もない。……道徳理論は、所与の活動における手元の諸条件と諸関係の分析的知覚である——それは観念の上での行為である。それは、行為の実際の遂行に先立って思考の上で行為を構成したものである。それは、従って、doingである——その出現途上における行為それ自身である。われわれが道徳の理論と実践のいかなる乖離からも無縁であるかぎり、理論は理念上の行為であり、行為は実行された洞察である。以上はわれわれのテーゼである。」²²⁾

やや長い引用を行ったが、これはこの時期のデューイの道徳理論についての「テーゼ」であり、ここには倫理学の科学化に向けた彼の倫理学理論の基本的な論点が示されている。

まず第1に確認できることは、道徳理論は、「道徳」についての理論ではないということ、それは「行為」についての理論だということである。しかも、この行為についての理論というのは、「行為の実際の遂行に先立って思考の上で行為を構成したもの」あるいは「理念上の行為」と言われているように、これは前節で見た「行為の結果についての見通し」と同じことである。つまり、デューイの言う道徳理論とは、実際の行為の遂行に先立って行為者が自らの頭の中に思い描いた行為の観念 (idea) であり、行為自体が内包するそのような行為の理知的側面のことを指して、デューイは道徳の「理論」(セオリー) と言っているのである。なぜなら、これこそが、実際にその場で「何を為すべきか」、その為すべき事柄を具体的に指示するからである。

「あらゆる人は、彼の行為が単なる衝動によるものではないとすれば、行為する以前に常に理論をもっている。」²³⁾

「いかなる行為 (単なる衝動とは区別されたものとしての) にとっても、理論はなければならず、行為が広範囲で、その重要性が大きくなればなるほど、理論の必要性も大きくなる。」²⁴⁾

ここでデューイが道徳理論について全く新しい理解の仕方を提起していることに注目すべきである。

そもそも人間の「行為」は、物体の運動や単なる衝動的活動とは異なって、遂行されるべき行為の結果について見通しをたて、行為の観念をあらかじめ頭の中に思い描くことによって、一連の活動を目的意識的に遂行していく点に特徴がある。だからこそ「行為」は道徳的な性質をもつ。そして、人間の「行為」を単なる運動や活動一般から区別する「行為」のこのような理知的側面を指して、デューイは道徳の「理論」と呼ぶのである。その意味で、デューイは、道徳の理論は書物の中に存在するものではなく、行為者本人の「精神」(mind)の中に存在するものだと述べている。²⁵⁾ いわば道徳理論は、実際に行為に取り組む人間主体の精神の機能として存在するということである。

第2に、デューイは、道徳理論を行為の理知的側面とおさえたいうえで、それを「手元の諸関係の認識 (recognition)」あるいは「所与の行為における手元の諸条件と諸関係の分析的知覚 (analytic perception)」と説明している。なぜなら、行為の遂行に先立って行為の観念を思い描くということとは、単なる主観的願望を思い描くということではなくて、行為の遂行に関わる客観的な諸条件を分析し、それに基づいて、何を為すべきかについての観念を知的に構成することだからである。つまり、道徳理論は「活動を要請する諸条件はいかなるものであるか」を認識し、「それらの諸条件が求める活動はどのようなものであるか」を洞察することに他ならない。²⁶⁾

「道徳理論は、ある特定のケースについての理論である——そのケースの徹底した分析である。そのような分析が必要とされるのは、求められる活動が真に道徳的な活動（つまり、知性に基づいた活動）となるためであり、一面的な、すなわち多かれ少なかれセンチメンタルな活動であることをやめて、そこに含まれている全ての諸関係の要請に応えるものとなるためである。」²⁷⁾

要するに、ある特定の行為が為されるべきだということは、その行為がその場の客観的な諸条件によって要請されている行為だということであり、それゆえ道徳理論は、行為の諸条件の客観的な分析を通じて、その場で実際に何を為すべきかを具体的に指示するものなのである。

「道徳科学は、為すことを必要とする活動についての行為主体による認識である——すなわち、その場の実践の世界を、その全ての具体的諸関係において知覚することである。」²⁸⁾

第3に、デューイは、道徳的な義務 (duty) あるいは当為 (ought) は、個々の行為に先立つ道徳的命令としてはじめからそこにあるものではなく、行為の場の客観的な諸条件によって行為者に求められる「現実の諸要請」に他ならないと述べている。

「当為 (ought) は、それ自身としては決して正当化されない。われわれがこれこれを為すべきだと言うのは、単に実践的状況のゆえにであり、われわれ自身が置かれているところの諸関係のゆえにであるにすぎない。」²⁹⁾

「人間の義務は、常に、彼が彼に求められていると見出す現実の諸要請 (demands) に応えることである——義務は、いかに荘厳で高尚であろうとも、抽象的な規則や理想から発するものではなくて、彼を取り巻く周囲の人々や諸事物への具体的な関係から発するものである。」³⁰⁾

デューイにとって道徳的行為とは、何か特別の道徳規範を義務として機械的に実行することではなくて、自らが置かれている現実の場の状況の中で、為すべき行為についての観念を自ら知的に構成

し、それを目的意識的に実現することを意味している。そして、行為者が実際にその場において「為すべき行為」と受けとめるものこそ、彼の道徳的義務（当為）に他ならないのである。言い換えれば、行為者が行為の諸条件の分析を通じて、実際にその場において知的に構成する観念（行為の結果の見通し）が、行為者の活動を実際に導く道徳的な義務であり、当為に他ならないということである。それゆえ、デューイは「あらゆる義務、あらゆる当為は、行動を要請する客観的状況の分析の結果」であると述べている。³¹⁾

かくして、デューイは「当為（ought）は常に存在（is）から生じ、存在（is）へと戻る。当為（ought）はそれ自身存在（is）であり、行動の上での存在（is）である」³²⁾と結論する。これは、道徳的な当為を抽象的な理念の世界から日常的な行為の世界の中に引き降ろし、それを経験的に説明可能な事実として捉えることを意味している。

しかしながら、第4に、デューイは、当為が存在に依拠し存在を表現するものだとしても、当為は存在一般に解消されてしまうわけではないことを指摘している。なぜなら、当為は諸事物の所与の状態をそのまま受け入れるのではなく、まさにこれから為されるべき事柄に関わっているからであり、それはあくまでも理念だからである。そして、デューイは、この理念としての当為を経験的な事実の世界から導き出すものこそ、人間の「知性」（intelligence）の働きであるとしている。当為は行為の諸条件の分析的知覚を通して獲得される「為すべき事柄」についての観念であり、それは行為者が置かれている場の「現実的な諸要請」の認識から生み出されるものである。だが、ここで問題になる分析や認識は、単なる事実の分析や認識ではなく、まさに何を為すべきかという当為に関わる事実の分析であり認識である。つまり、諸条件の分析ははじめから、何を為すべきかという実践的な意識に基づいた認識活動であって、無色透明の理論的意識に基づいた認識活動ではない。そして、デューイは、このような何を為すべきかという実践的な観点から諸事実を分析し知覚する人間精神の働きを「知性」と呼ぶのである。

「ここでの判断の内容は、実践的なものであって理論的なものではないということが銘記されなければならない。問題は、諸事物の所与の状態に関するものではなく、採用されるべき目的に関するものである。あるいはむしろ、それは、ある特定の活動がそこへと向かっていく結果（つまり目的）を指摘するかぎり、裸の現実的な事実に関心をはらう。実践的意識と理論的意識の違いは、前者が為されるべきある事柄についての意識だということである。そして、この為されるべきある事柄についての意識が、義務の意識なのである。」³³⁾

当為は諸事実の客観的分析から生じる。だが、この諸事実の客観的分析は、無色透明の事実認識ではなく、特定の状況の中で何事かを為そうとする人間の実践意識に媒介された諸事実の分析的知覚である。そして、この実践意識に媒介された諸事実の分析的知覚ということをも可能にするものを、デューイは「知性」と呼ぶ。だから、当為は存在から生み出されるとしても、存在そのものではなく、存在を「行為の結果の見通し」という観点から捉えた理念なのである。言い換えれば、当為は、観念に基づいて行動する人間主体の「知性」が生み出すものなのである。

第5に、デューイは、通常のいわゆる「道徳理論」、すなわち「道徳」に関する一般的な概念や道徳規範といったものは、行為の諸条件を分析するための「作業道具」(working tools)であると述べている。³⁴⁾ デューイにおいては、何を為すべきかという当為は、実際の行為の場において、行為者が自らに求められていると見出す「現実の諸要請」であり、行為者が実際にその場において為す必要があると受けとめるものである。そして、このような当為は、人間の知性の働きによって、諸事物の客観的な分析から生み出される。それゆえ、道徳理論は、行為者が具体的にいまこの場で何を為すべきかについて、彼の観念(当為)を構成することに役立つものでなければならない。そうでなければ、それは行為者の実践を導く本来の意味での道徳理論とは言えない。そこで、道徳理論は、行為の状況がそれぞれに個別具体的なものであるのに応じて、それ自身個別具体的なものでなければならないということになる。つまり、道徳理論は実践の理論であり、実践の理論は言葉による一般的な命題や概念にとどまってはならず、具体的な経験の中で生きて働く理論とならなければならないということである。このことは、デューイが道徳理論は書物の中にあるのではなく、個々の行為者の「精神」の中にあると述べていたことに通じている。

だが、そうだとすると、道徳については一般理論というものは存在しないということになるのだろうか。つまり、道徳科学(moral science)とか倫理学といった学問は成立しないということになるのだろうか。これに対して、デューイは、こうした問題が生じるのは「理論というものについての未熟な理解」³⁵⁾に原因があると述べている。そして、道徳理論にかぎらず、自然科学の理論でさえも、実は、事実から離れた一般的陳述として存在するものではなく、「科学を書物の中の多数の公式や命題と同一視するのは通俗的な迷信である」と述べている。³⁶⁾

デューイはここで、およそ理論と呼ばれるものは、本来すべて、人間の実践を導くための「道具」であるという主張を展開する。例えば、万有引力の法則は、それ自体として存在する抽象的理論としては何の意味ももたない。それは、実際に目の前にある二つの運動する物体の間の力学的な関係を具体的に明らかにする「分析の道具」としてはじめて意味をもつ。あるいは、トンネル工事を例にとれば、数学や機械工学や地質学などの理論は、実際に取り組むべき工事の内容を具体的に決定するために、その場の特殊な諸条件を分析し明らかにするための「道具」として用いられる。それと同様に、いわゆる道徳の理論(道徳規範や道徳命題など)も、現実の行為から離れた「道徳」についての一般的陳述としては何の意味ももたない。それは、そういう抽象性を脱して、現実の目の前にある行為の状況を明晰な一群の諸関係へと秩序づけるための「分析の道具」とならなければならない。

このように説明したうえで、デューイは、理論というのは、過去の様々な諸経験を集約し、そこから引き出された「諸関係の一般的陳述」(法則や公式、あるいは命題)であって、それは将来の類似の経験において、その経験に含まれる漠然とした事実関係を明晰にし意味づけるために、いつでも使用可能な形に整えられた道具なのだとしてデューイは説明する。つまり、理論と呼ばれるものは、諸経験についての「一般的な先例観念」であって、特殊なケースが生じたとき、それに照らしてそ

こに含まれる諸条件を析出するための「分析の道具」なのである。

「理論は、取り組むべき特殊な諸事実とは完全に異なった領域に属するものではない。それは以前の同様の諸経験から引き出され、いかなる特殊な経験をも予期し、従って解決を助けるのに直ちに役立つこれら同じ諸事実の概括的陳述である。」³⁷⁾

それゆえ、デューイは、道徳理論は「あらゆる道徳的状況に含まれている現実についての一般的陳述でなければならない」と述べている。³⁸⁾

このようにデューイは理論というものを、人間の実践において使用される「分析の道具」と捉え、理論はいつでも特殊な実践のケースに翻訳され、そのケースの本性を明らかにし、そのことによってその場の問題解決に資するものであると説明している。人間の実践は観念に基づいた行動であり、達成されるべき行動の結果をあらかじめ頭の中に観念という形で描き出し、それを実現する活動である。この観念が行動の目的であり、その場で実際に何を為すべきかを指示する当為となる。そして、この目的ないしは当為は、人間の知性の働きを通して、実践の場の客観的諸条件の分析から生み出される。だから、理論はこの人間の知性が客観的諸条件の分析から目的ないし当為をつくり出すために用いる道具だということになる。

そうだとすれば、自然科学と道徳理論との間に原理的な相違はないということになる。なぜなら、自然科学の理論といえども、それは本質的には人間の実践を導くための理論に他ならないからであり、人間の実践はそれが思念された目的を実現する企てであるかぎり道徳的な意味をもつからである。

註

- 1) John Dewey, "Ethics and Physical Science," in *Early Works of John Dewey vol. 1* (Carbondale, Illinois : Southern Illinois University Press, 1969), pp. 205-226.
- 2) Ibid., p. 209.
- 3) Ibid., pp. 223. 224.
- 4) John Dewey, *Ethics of Democracy*, in *Early Works vol. 1*, pp. 237. 236.
- 5) Ibid., p. 244.
- 6) Ibid., p. 244.
- 7) Ibid., p. 241.
- 8) デューイのグリーン批判は、直接的には以下の論文で行われた。John Dewey, "Green's Theory of Moral Motive," in *Early Works vol. 3* (1969). PP. 155-73. John Dewey, "Self-Realization as Moral Ideal," in *Early Works vol. 4* (1971), pp. 42-53. 尚、デューイのグリーン批判については、拙稿「デューイ教育哲学の形成と原理(4)」『鹿児島大学教育学部紀要（教育科学編）』第41巻、1990年3月、pp. 253-59, 参照。
- 9) John Dewey, "Moral Theory and Practice," in *Early Works vol. 3*, p. 94.
- 10) Ibid., pp. 95. 96.
- 11) Ibid., p. 99.
- 12) John Dewey, "Ethics and Physical Science," in *Early Works vol. 1*, pp. 209-10.
- 13) Ibid., pp. 218-19.

- 14) John Dewey, *Outlines of a Critical Theory of Ethics*, in *Early Works vol. 3*, p. 241.
- 15) *Ibid.*, p. 218.
- 16) *Ibid.*, p. 241.
- 17) *Ibid.*, p. 242.
- 18) *Ibid.*, p. 242.
- 19) *Ibid.*, p. 242.
- 20) *Ibid.*, p. 242.
- 21) *Ibid.*, pp. 246—47.
- 22) John Dewey, "Moral Theory and Practice," in *Early Works vol. 3*, pp. 94—95.
- 23) *Ibid.*, p. 99.
- 24) *Ibid.*, p. 96.
- 25) *Ibid.*, p. 99.
- 26) *Ibid.*, p. 100.
- 27) *Ibid.*, p. 98.
- 28) *Ibid.*, p. 99.
- 29) *Ibid.*, p. 105.
- 30) *Ibid.*, p. 106.
- 31) *Ibid.*, p. 107.
- 32) *Ibid.*, p. 105.
- 33) *Ibid.*, p. 108.
- 34) *Ibid.*, p. 100.
- 35) *Ibid.*, p. 94.
- 36) *Ibid.*, p. 99.
- 37) John Dewey, "Green's Theory of Moral Motive," in *Early Works vol. 3*, p. 157.
- 38) *Ibid.*, p. 158.